

二〇一五年度秋季企画画展

「大隈重信展——早稲田から世界へ」

星 原 大 輔

早稲田大学大学史資料センターでは、二〇〇三年より『大隈重信関係文書』の編纂事業を開始し、大隈宛の日本人和文書翰を翻刻して毎年一巻ずつ刊行してきた。そして、二〇一五年三月、第一一巻を以って完結するに至った。収録対象は、早稲田大学図書館が所蔵する「大隈文書」はもちろん、大学史資料センターや佐賀市大隈記念館、さらに全国の各機関が所蔵する原資料であり、収録総数は七四〇四通にのぼった。

こうして膨大な一次史料を読み解いてきたことにより、大隈を中心とする人的ネットワークの諸相が浮かび上がり、さらに大隈と彼をめぐる人びとの知られざる動きがいろいろと明らかになった。そこで、二〇一五年度の秋季企画画展では、その成果の一環として、『大隈重信関係文書』に収録された書翰はもちろん、さまざまな史料や写真などを通して、「民間外交」「教育」「文明運動」といった分野に大隈が残した足跡を紹介した。

会期は二〇一五年一〇月一日から十一月八日まで、会場は早稲田大学大隈記念タワー一〇階の一二五記念室であった。本企画展の来館者は、一五〇四名を数えた。また会期期間中、「読売新聞」一〇月一五日付で、当展示の概要が

2015年度 秋季企画展

10/1 Thu-11/8 Sun
開業日：10/4、10/11、10/25、11/1、11/6

10:00-18:00

早稲田から世界へ

大隈重信展

From Waseda to the World

入場料無料

大隈記念タワー 10階 125 記念室

◆企画展示 『大隈重信展－早稲田から世界へ』
日時：2015年10月1日(木)～11月8日(日) 10:00～18:00 閉業日：10月4日(日)・11日(日)・25日(日)/11月1日(日)・6日(金)
会場：早稲田大学大隈記念タワー10階125記念室 入場料：無料

◆シンポジウム 『大隈に手紙を寄せた人びと－大隈重信へのまなざしー』
日時：2015年10月12日(祝・月・授業日) 14:45～16:15 会場：早稲田大学大隈記念講堂小講堂 ※当日先着順(事前申込なし)/定員300名
登壇者：五百旗頭重(東京大学大学院法政学研究所教授)/真辺将之(早稲田大学文学部学術院准教授)/大庭邦彦(駿徳大学文学部文学科教授)

主催：早稲田大学 大学史資料センター 042-451-1343 <http://www.waseda.jp/culture/archives/>

ポスター

報道された。

なお、展示資料については、早稲田大学図書館、筑波大学付属図書館、国立国会図書館、白瀬南極探検隊記念館、実業之日本社、村上正俊氏などのご協力をいただいた。あらためて各位のご厚意に感謝申し上げる次第である。

I 世界の道は早稲田に通ず——私設外務省、私設国際倶楽部

一 早稲田の大隈重信邸

大隈重信が約四〇年間過ごした早稲田の大隈邸には、毎日多くの人びとが訪れたが、その中には、外国から来た要人の姿がしばしば見られた。日露戦争時にイギリスで外債募集に尽力した高橋是清は、「侯が外国の賓客に尽された事も一通りや二通りではない、だから外客で侯に招かれなるとか、其庭園を見ないとか言ふことは恥と思つてゐた。之がどの位外人に誇りを与へ又好意となつたか知れない、従つて日本のために非常に利益となつてゐる」と語つてゐる。歴史の表舞台にはなかなか現れないが、大隈の外国人との交際は、日本の対外関係に大きな影響を及ぼしたのであつた。ここでは、世界各地から訪れた主な人びとについてパネルで紹介した。

〔主な展示資料〕

○写真「大隈伯爵家温室内の食卓」【パネル】

村井弦斎『増補註釈 食道楽』冬の巻（報知社出版部、一九〇四年）に掲載された口絵。



大隈家使用の銀食器
(大学史資料センター所蔵)

○大隈家使用の銀食器

伊藤博文から寄贈されたもの。贈られた時期や経緯は不明。

二 アルバール＝カーンの来日

アルバール＝カーン (Albert Kahn、一八六〇～一九四〇) は、フランス生まれのユダヤ人である。彼は世界平和の実現のために、人生と莫大な財産を捧げようと考え、いくつかの事業を起こした。その一つが「地球映像資料館」で、世界六〇カ国にカメラマンを派遣し、

現地の日常生活や風俗、建物、自然などを写真や映像に収めた。日本もその対象国の一つで、一九〇八(明治四一)年末、カーンはカメラマンを連れて来日し、一二月二八日、早稲田の大隈邸を訪ねた。ここではカーンと大隈、そして早稲田大学との関係を示す資料や写真を展示した。

〔主な展示資料〕

○写真「外国賓客を歓迎する大隈家」 一九〇八年一二月二八日 【パネル】
大隈とカーンをはじめ、フランス大使ゼラル、高橋是清や大倉喜八郎ら財界の有力者、早稲田大学幹部らが写っている。

○高田早苗書翰 大隈重信宛 一九〇八年一二月 早稲田大学図書館所蔵

本書翰は、一二月二八日の午餐会の参加者に関する相談と、カーンから依頼された中国要人への紹介状の件について。

○早稲田大学編輯部編纂『早稲田大学創業録…三十年紀念』（早稲田大学出版部、一九一三年）

早稲田大学の「第二期計画基金寄附芳名録」に、カーンの名前が記されている。寄付金は、二〇〇〇円であった。

○江森泰吉編『大隈伯百話』（実業之日本社、一九〇九年）

「外国人の刺戟」のタイトルで、大隈重信によるカーンの論評が掲載されている。

三 東アジアの要人との交流

大隈邸には、アジア諸国からの要人も多数訪れている。例えば、清国の康有為や中華民國の孫文、朝鮮の金玉均、ベトナムのファン・ボイ・リチャウ、インドのタゴールなどである。ここでは、中国近代史の巨頭である康有為と、孫文との交流を示す写真や書翰などを展示した。

〔主な展示資料〕

○写真「康有為と大隈宛書翰」一九二一（明治四四）年【パネル】

雑誌『新日本』第一巻第一〇号（富山房、一九二一年二月）に掲載された写真。自筆で「呈大隈伯以当相見、康有為贈、辛亥六月」と書き入れがある写真と、七月一五日付の大隈宛康有為書翰。

○写真「康有為」一九二七（大正六）年一月撮影【パネル】

自筆で「贈大隈侯爵如常相見。康有為六十像敬呈印」と書き入れがある。

○犬養毅書翰 大隈重信宛 一八九九（明治三二）年一月二八日 早稲田大学図書館所蔵

本書翰は、来訪した伊藤博文と康有為・梁超啓の今後の処遇について協議し、康には費用七〇〇〇円を与えて離日



大隈邸の孫文歓迎会

(『歴史写真』大正2年4月号(国立国会図書館所蔵)より転載)

させる方針が決定したことを伝えたもの。

○康有為撰文並書「大隈侯大徳頌」一九二三(大正一二)年 早稲田大学図書館所蔵【パネル】

本書幅は、亡くなった大隈を康有為が称えた文章を自筆で書したもの。

○写真「孫逸仙(孫文)氏と大隈伯」【パネル】

○写真「大隈伯邸に於ける孫逸仙氏招待会」【パネル】

○写真「大隈邸の孫文歓迎会」【パネル】

いずれも、一九一三(大正二)年二月二五日、孫文が大隈邸を訪問した際に撮影されたもの。一つ目と二つ目は『新日本』第三巻第四号(富山房、一九一三年四月)に掲載され、三つ目は『歴史写真』大正二年四月号(歴史写真会、一九一三年)に掲載された。当日は、高田早苗ら大学関係者や同仁会関係者、渋沢栄一らも招かれた。

○孫逸仙(孫文)電報 大隈重信宛 一九一三(大正二)年三月二六日【パネル】

孫文が帰国後に滞日中のお礼を告げた電報。

○孫文書翰 大隈重信宛 一九一四(大正三)年五月十一日 早稲田大学図書館所蔵

本書翰は、同年四月に内閣総理大臣に就いた大隈に対して、袁世凱政権の対外政策を強く批判し、中国革命党への支援を要請したもの。

II 東西文明の調和融合——大隈重信の文明運動

一 早稲田大学と私立大学

大隈は私立大学の存在意義を、次のように語っている（『私立大学設立に就いて』『早稲田学報』第五〇号、一九〇一年二月）。

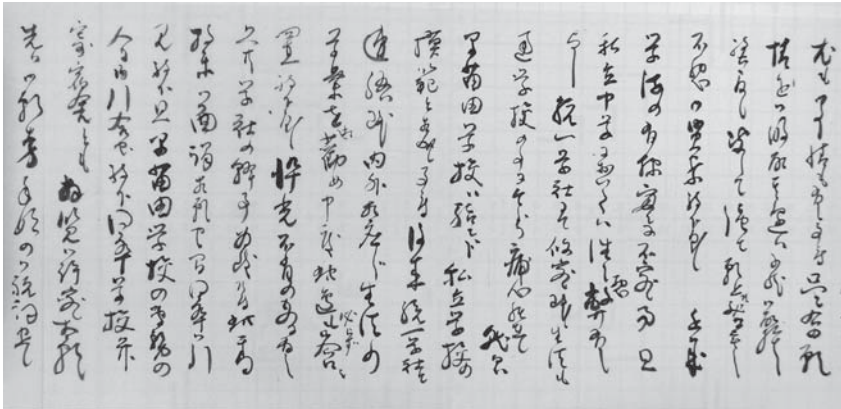
高等の教育の方になれば、之は凡て国家の設備の下に教育をして往くことが果して利益であるや否や頗る疑問である。随分国家の力を以てやればやれぬ事はないが、或場合に於て国家の目的と云ふものが実に其時の政府の目的であつて真に国民の目的を代表する事が出来ぬことがある。（中略）爰に於て学校は官立も公立も私立も随分私は必要であると思ふ。而して其間に切磋琢磨して遂には真理の光明を放ち非常の学説を生み出すやうにもなるのであらう。

新規の教育事業を志し協力を求めてくる人々に、大隈は様々なかたちで支援した。創立準備や運営に与つた学校機関は数多く存在するが、ここでは、同志社大学、日本女子大学、女学院との関係を紹介した。

〔主な展示資料〕

○鳥尾小弥太書翰 大隈重信宛 一九〇三（明治三六）年一月九日

本書翰は、鳥尾が統一学社を創立するにあたって、大隈に出資を依頼したもの。本文中に、「早苗田^マ学校は殆んど私立学校の模範」との一節がある。



鳥尾小弥太書翰（大学史資料センター所蔵）

○写真「大隈重信の同志社訪問」一九一三（大正二）年一月二七日

【パネル】

○新島襄書翰 大隈重信宛 一八八八（明治二一）年一〇月二二日

明治二一年二月、新島襄から募金活動の援助依頼を受けて、大隈は外相官邸に渋沢栄一、岩崎彌之助、大倉喜八郎ら実業家を招き、新島への支援を依頼した。書翰は、そのお礼と、今後の活動についてのお願いに関するもの。新島の亡き後も、大隈は同志社から「社友」として迎えられて、交流を持ち続けた。写真は、大正二年、大隈が故郷佐賀で行なわれる鍋島直正銅像除幕式に出席する途中、同志社を訪問した際のもの。

○写真「日本女子大学校舎建築中記念」【パネル】

○中川小十郎書翰 大隈重信宛 一八九八（明治三一）年六月三日 早

稲田大学図書館所蔵

大隈は、成瀬仁蔵の女子大学設立の事業計画に賛同し、各地で演説したり各方面に支援金を依頼したりと、日本女子大学創立の日まで、成瀬の活動を支えた。書翰は、女子大学校創立事務所幹事長の中川が、支援依頼状の草案二通を送ったもの。その一通は、福澤諭吉宛の草案。写真は、建築中の校舎前で、西園寺公望、成瀬仁蔵、広岡浅子らと一

緒に撮影されたもの。

○写真「女子学院高等科卒業式」一九二一（明治四四）年【パネル】

○矢嶋楯子書翰 大隈家執事宛 一九〇一（明治三四）年三月二六日

大隈は、矢嶋楯子が会長を務めていた日本キリスト教婦人矯風会の活動を、綾子夫人とともに支援した。その関係で、矢嶋が初代院長となった女子学院の行事にもたびたび招かれていた。書翰は、大隈夫妻に女子学院卒業式への出席を求めたもので、写真は、一九二一（明治四四）年の卒業生たちと一緒に撮影されたもの。

二 大隈と南極探検

大隈は一九一〇（明治四三）年七月、白瀬のぶの計画に賛同し、南極探検後援会の会長に就任した。以後、白瀬隊の南極探検上陸まで、募金演説会や早慶の野球大会などを開催するなど、物心両面から支援し続けた。彼らは大隈への感謝の意を表して、南極にある入り江の一つを「大隈湾」と命名している。ここでは、七月五日の「南極探検計画発表演説会」の様子を写した写真などを展示した。

〔主な展示資料〕

○写真「南極探検演説会の行われた錦輝館前の行列」村上正俊氏所蔵【パネル】

○写真「南極探検演説会の会場内」村上正俊氏所蔵【パネル】

いずれも、一九二一（明治四四）年七月五日に開催された南極探検演説会の時のもの。前者は一列に並んで会場に入ろうとしている人々を写したもので、後者は演説をする大隈を撮影したもの。

拜啓秋冷之候益々御清稔奉賀
候陳は白瀬中尉南極探檢之義
其後適當の船舶を得ざるが爲
り出發遲延致居候處今回彌々
報效義會所屬第二報效丸を購
入東郷大將開南丸と命名十一
月貳十八日を以て出發のこと
に決定仕候其詳細は別紙記載
の如き次第に付國民の元氣振
興上此際奮つて此壯舉の爲り
不拘多少義金御寄贈被成下度
此段御依頼申上候 敬具

明治四十三年十一月

南極探檢後援會長

伯爵 大隈重信

殿

大隈重信書簡翰 (大学史資料センター所蔵)

○白瀬轟書翰 大隈重信宛 一九一〇(明治四三)年九月二六日 早稲田大学図書館所蔵

本書翰は、南極探檢船の船名および船主旗の決定したことを報告したものの。

○大隈重信書簡翰 梅原良宛 一九一〇(明治四三)年二月【パネル】
衆議院議員の梅原良に宛てて、南極探檢後援會長の肩書きで送ったもの。開南丸の出航日を通知し、寄付金を依頼している。

○写真「大隈邸における探檢成功記念」一九二二(明治四五)年六月二一日 白瀬南極探檢隊記念館所蔵【パネル】

南極上陸に成功した白瀬隊が、帰国した翌日に大隈邸を訪れた際に、庭園で撮影したもの。

○南極探檢命令録 筑波大学図書館所蔵

南極探檢後援會長の大隈重信に宛てた一九一〇(明治四三)年二月二一日付の「(事業)概算表」と、命令第四二号から第四九号まで(一九一一年一月二二日～四月二五日)が転記されたもの。

三 『開国五十年史』編纂事業

『開国五十年史』は、菊版上下巻あわせて二二〇〇ページほどある

大著で、「我国現代に於ける進歩發達の源委、曲折及び其経過、変遷の跡」を詳らかにし、「殊文異域の海外に普く此特質ある曠古の事歴を知悉せしめん」ために刊行された。そのため、憲法制定、政治・外交、財政、軍事、政党、法制、通信、鉄道、海運、教育、医学、宗教、哲学、文学、音楽、新聞、社会主義、国語論など、幅広いテーマの論文が収録されている。また執筆者も、大隈以外に、伊藤博文、山県有朋、松方正義、副島種臣、板垣退助、山本権兵衛、前島密、西園寺公望、新渡戸稻造、坪内逍遙、山路愛山、後藤新平、尾崎行雄、安部磯雄など、実に豪華な顔ぶれが並んでいる。ここでは、編纂の流れを知ることができる「編集日誌」を中心に展示した。

〔主な展示資料〕

○写真「大隈重信ら三名」【パネル】

開国五十年史編修所の中枢メンバーの一人である副島八十六と一緒に収まっているもの。

○「開国五十年史」編集日誌 筑波大学付属図書館所蔵

計三冊。一九〇四（明治三七）年八月八日から、一九一〇（明治四三）年七月一四日までが記されている。各冊の冒頭に「開国五十年編修所」の朱印が押されている。

○稿本「日本工業史要」 筑波大学付属図書館所蔵

『開国五十年史』下巻に収録されている「工業誌」の稿本。各所に朱筆による訂正補記が施されている。

○洪沢栄一書翰 大隈重信宛 一九〇五（明治三八）年七月七日 早稲田大学図書館所蔵

本書翰は、福地源一郎と五十年史編纂に関して相談し、「慶喜公御伝記」の編纂手順を少し修正することになったことを伝えたもの。福地が徳川慶喜から聞き取りを行なって執筆する予定であったが、翌年一月に死去した。

○朝河貫一書翰 大隈重信宛 一九一〇（明治四三年）五月一日 早稲田大学図書館所蔵

朝河は当時イェール大学助教授を務めていて、本書翰で、英版がアメリカで評判がよく、また『The American Historical Review』から書評の執筆依頼があったことを伝えている。

○『FIFTY YEARS OF NEW JAPAN』（英版『開国五十年史』）Vol. I、II 一九〇九（明治四二年）年【パネル】

同書は、アメリカ大統領セオドア・ルーズベルト、イギリス国王エドワード七世、ドイツ皇帝ヴィルヘルム二世、ロシア皇帝ニコライ二世ら「欧米元首」や「有力な政治家、学者等」に献呈された。

○英文開国五十年史出版契約書 一九〇九（明治四二年）一月二二日【パネル】
 スミス・エルダー商会およびヒュインと取り交わした契約書。

○Letters : to Okuma, S. 「Apr. 110' 一九一〇」一九一〇（明治四三年）四月二〇日 早稲田大学図書館所蔵【パネル】

「開国五十年史」贈呈に対するロシア皇帝ニコライ二世からの謝意伝達

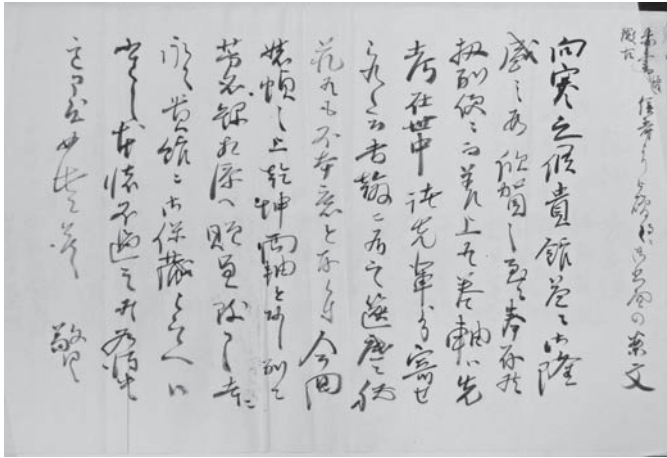
○モンジェラ書翰 大隈重信宛 一九一〇（明治四三年）七月二一日【パネル】

「開国五十年史」贈呈に対するドイツ皇帝ヴィルヘルム二世からの謝意伝達

Ⅲ 日本近代史の至宝——大隈重信関係文書の来歴

一 市島謙吉資料などから見る関係文書の来歴

今回、大学史資料センターが編纂した『大隈重信関係文書』に収録した書翰の中には、大隈家から縁故の人びとに



大隈家書翰案 鍋島侯爵家徴古館宛 (大学史資料センター所蔵)

進呈されたものが一二二通含まれている。大隈のもとにあった資料群がどのような経緯で受け継がれてきたのか。ここでは、市島謙吉の日記などを展示して、これら大隈宛書翰の来歴について展示した。

〔主な展示資料〕

○市島謙吉撰「双魚堂日誌」二四 早稲田大学図書館所蔵

一九二二(大正一一)年三月二日条に、市島が綾子夫人から門外不出の關係資料が多数存在することを伝えられ、今後の取り扱いの相談を受けたことが記されている。

○市島謙吉「撰」『戊辰漫録』五 早稲田大学図書館所蔵

一九二八(昭和三)年九月四日条に、市島が大隈信常と呼ばれ、大隈宛の書翰一八通を譲り受けたことが記されている。「尤も愉快とする所」とある。

○大隈家書翰案 鍋島侯爵家徴古館宛 一九二八(昭和三)年一月一日 【パネル】

○大隈家書翰案 大隈誕生記念館宛 一九二八(昭和三)年一月一日 【パネル】

鍋島家が一九二七(昭和二)年佐賀に創立した資料館「徴古館」と、

当時郷里の佐賀にあった「大隈誕生記念館」に、大隈家が「大隈宛書翰を贈呈した際の送付状の草案。現在、前者は公益財団法人鍋島報効会が、後者は佐賀市大隈記念館が所蔵する。

二 大隈家から資料を進呈された人びと

大隈家から進呈された個人のうち、現在、所在が判明している分について、人物紹介と実物の展示を行なった。

〔主な展示資料〕

○写真「創立三〇年祝典での大隈重信・高田早苗たち」【パネル】

○「大隈家旧蔵 風雲書簡」 早稲田大学図書館所蔵

高田早苗（一八六〇（安政七）年～一九三八（昭和二三）年）旧蔵。早稲田の四尊の一人で、早稲田大学初代学長や第三代総長を務めた。写真は、早稲田大学創立三〇年祝典で撮影されたもの。巻子が収められている桐箱には、市島謙吉（蓋表）・會津八一（蓋裏）・高田早苗（箱底）の書き入れがある。

○写真「馬車上の大隈重信と市島謙吉ら」【パネル】

○「大隈重信宛書簡 乾・坤（原安三郎蒐集書画書簡）」 早稲田大学図書館所蔵

市島謙吉（一八六〇（安政七）年～一九四四（昭和一九）年）旧蔵。早稲田の四尊の一人で、早稲田大学図書館初代館長などを務めた。巻子には、原安三郎所蔵の印が押されているが、市島の日記などから市島が大隈家から進呈されたものと想定される。

○写真「写真「中野礼四郎」『創立二五周年記念 早稲田中学校創業要録』

○「早稲田中学校高等学校寄贈 大隈重信関係文書」

中野礼四郎（一八七一（明治四）年～一九六四（昭和三九）年）旧蔵。早稲田大学で国史を講義した。その後、早稲田中学校の教員、教頭を経て、一九一七（大正六）年、早稲田中学校第三代校長となった。

○写真「大隈重信と外国男性・塩沢昌貞」【パネル】

○「大隈重信宛諸家書簡 塩沢昌貞旧蔵」 早稲田大学図書館所蔵

塩沢昌貞（一八七〇（明治三）年～一九四五（昭和二〇）年）旧蔵。早稲田大学第四代学長、早稲田大学第二代総長。

今回は、一九二八（昭和三）年九月付の塩沢宛大隈信常書翰と、一八八三（明治一六）年一月四日付の大隈重信宛小野梓書翰を展示した。

○写真「大隈・増田義一・新渡戸稲造」『実業之日本社百年史』口絵【パネル】

○「三条実美他大隈侯宛書簡」

増田義一（一八六九（明治二）年～一九四九（昭和二四）年）旧蔵。実業之日本社の創業者。大隈は「経済的の方面実業的の方面に於ける早稲田精神の伝播者」と言い、同社の事業発展に力を貸した。

IV 写真・石碑からみる大隈重信——大隈の交友録

一 大隈が収まっている写真——外国からの訪問客

大隈がこうした来訪者たちと一緒に収まっている写真が、数多く残っている。ここでは、『伯爵大隈家写真帳』に収録されている大隈邸の写真と、外国からの訪問客との写真を取り上げ、大隈の交遊録の一端を紹介した。

【主な展示資料】【すべてパネル】

○女性二人と歓談中の大隈重信

雑誌『グラヒック』一(一八)(有楽社、一九〇九年九月)を参考に、「女子大学を卒業した広東豪商の令嬢薪栄と談話する大隈 一九〇九年頃」とキャプション表記した。

○大隈重信とタゴール 一九一六(大正五)年六月一〇日

○大隈重信・綾子と外国婦人訪問者

○大隈重信・綾子と外国人訪問者

雑誌『実業之日本』一四(九)(実業之日本社、一九二一年四月)を参考に、「スタンフォード大学総長ジヨルダン博士 歓迎会 一九一一年(明治四四)年七月二日」とキャプション表記した。

○大隈重信式典演説

雑誌『実業之日本』一三(二)(実業之日本社、一九二〇年二月)を参考に、「報知新聞主催米国観光団握手会 一九二〇(明治四三)年一月二五日」とキャプション表記した。

○大隈重信・綾子とアジア某国要人夫妻?と青柳篤恒

雑誌『写真画報』二(八)(博文館、一九〇七年七月)を参考に、「蒙古トルハト王夫妻と大隈夫妻、青柳篤恒 一九一一年(明治四〇)年頃」とキャプション表記した。

○清国皇族の大隈邸訪問

雑誌『実業之日本』一三(四)(実業之日本社、一九二〇年二月)を参考に、「清国皇族の大隈邸訪問 一九二〇(明治四三)年四月二日」とキャプション表記した。

に掲載された。

○野球部親善記念（一九二二（大正一〇）年九月二二日）
ワシントン大学野球部が大隈邸に来訪した際に撮影されたもの。



米国職業野球団首脳を招いたレセプション
（『歴史写真』大正10年1月号（国立国会図書館所蔵）より転載）

○大隈重信と名士

雑誌『実業之日本』一四（二二）（実業之日本社、一九二二年六月）を参考に、「ニュージールランド名誉領事ヤングと南極探検後援会一九二一（明治四四）年」とキャプション表記した。

○米国前大統領候補ブライアン一行の大隈訪問 一九〇五（明治三八）年一〇月一八日

○大隈重信と学生 一九二四（大正三）年九月
日本人中心に構成された野球団「シアトル朝日クラブ」が来日した際に撮影されたもの。

○米国職業野球団首脳を招いたレセプション 一九二〇（大正九年一月三〇日）

来日したコースト・リーグ選抜軍が大隈邸に来訪した際のもの。
雑誌『歴史写真』大正一〇年一月号（歴史写真会、一九二二年一月）

二 大隈重信署名の篆額

大隈署名の篆額が、いくつか残っている。自筆である可能性はきわめて低いが、大隈が自分の署名を記すことを承諾したという事実は、大隈の人脈などを知る上で、重要な手がかりとなるであろう。ここでは、二〇一五年九月時で存在が明らかであったものを、パネルで紹介した。

〔主な展示資料〕

- 「小野梓君碑」一八八七（明治二〇）年五月建立 高知県宿毛市・清宝寺
- 小野梓（一八五二（嘉永五）年～一八八六（明治一九）年）の建立碑
- 「深川君之碑」一八九〇（明治二三）年一〇月建立 佐賀県西松浦郡有田町・陶山神社
- 第八代深川栄左衛門（一八三二（天保三）年～一八八九（明治二二）年）の顕彰碑
- 「感乎」一八九五（明治二八）年五月建立 千葉県千葉市・宝蔵院
- 藤代市左衛門（一八四六（弘化三）年～一八九四（明治二七）年）の顕彰碑
- 「経綸之碑」一九〇六（明治三九）年五月建立 東京都港区・青山霊園
- 石丸安世（一八三九（天保一〇）年～一九〇二（明治三五）年）の顕彰碑
- 「平岡君之碑」一九〇七（明治四〇）年建立 福岡県福岡市・聖福寺
- 平岡浩太郎（一八五一（嘉永四）年～一九〇六（明治三九）年）の顕彰碑
- 「田村昌宗之碑」一九一一（明治四四）年一〇月建立 千葉県千葉市・宗胤寺
- 田村昌宗（生年不明～一九〇九（明治四二）年）の顕彰碑

- 「室孝次郎君之碑」一九〇六（明治三九）年一〇月（二〇日）建立 新潟県上越市・高田公園
室孝次郎（一八三九（天保一〇）年～一九〇三（明治三六）年）の顕彰碑
- 「久須美祐伴君之墓銘碑」一九〇八（明治四一）年一月建立 新潟県長岡市
久須美祐伴（一八二二（文政五）年～一八七六（明治九））の顕彰碑
- 「駐蹕之碑」一九一三（大正二）年三月建立 新潟県柏崎市・久寛荘
明治天皇の北陸巡幸に関する記念碑。内藤久寛（一八五九（安政四）～一九四五（昭和二〇））が自宅に建立した。
- 「四方弘克碑」一九二一（明治四四）年四月建立 三重県松坂市・信楽寺
四方弘克（一八八三（明治一六）年～一九二一（明治四四）年）の顕彰碑。